

# 第3章

## 区民健康村 むらづくりのあゆみ



# 1981年(昭和56年)～1990年(平成2年)

1981年(昭和56年)5月

## ■ 健康村づくりの協力依頼

世田谷区は「世田谷区基本計画」の重点事業のひとつとして、区民の健康増進とスポーツ、レクリエーション活動の場を提供するとともに、人と人との交流、自然とのふれあいを通して「第二のふるさと」づくりを目指すことを基本理念として「区民健康村」の設置を計画。数ある候補地の中から川場村を選定し、「区民健康村づくり事業」への協力を川場村に依頼した。川場村としても「農業プラス観光」と一致する施策でもあり、協力することを快諾した。



1981年(昭和56年)11月

## ■ 区民健康村相互協力協定締結

区民健康村相互協力に関する協定、いわゆる「縁組協定」が調印され、12月には相互協力に関する覚書を交換。都市と山村が、お互いに不足しているものを補完しながら双方の自治体同士・住民同士の独自性を尊重し、人と人との交流を基軸に末永い未来を築き上げて行く努力と、相互の信頼を基本としてそれぞれの地域社会の発展のために協力しあうことを誓った。



1982年(昭和57年)5月

## ■ 「レンタアップル」事業開始

世田谷に住んでいながら収穫できるリンゴの木を持ってみる。このアイデアが1982(昭和57)年から始められた。健康村施設完成前の事前交流活動の一環として取り組まれたレンタアップルは、リンゴの木を1年間借りて春の花摘みと秋の収穫を行う農業体験である。参加者は園主から花摘みや品種の話聞き、手順を教わりながら作業にいそしむ。

春の日差しと花の香りに包まれながら、家族やグループの名札が掛けられた木に分かれ、秋の収穫に思いを馳せながらひとつひとつの花を選びすぐっていく。秋にはリンゴの木を所有する満足感を得て、収穫方法を教わるなど、園主との会話が弾む。

長年にわたるリンゴ農家と参加者の間には、川場を訪れたら気軽に立ち寄る親戚付き合いのような関係も数多く生まれており、この40年間で区民と農家双方が親から子へと世代を超えて付き合いを続けている例も珍しくない。



1986年(昭和61年)4月

### ■ 世田谷区民健康村供用開始

1984(昭和59)年9月から建設されていた、世田谷区民健康村『ふじやまビレジ』と『なかのビレジ』の供用を開始した。4月23日に関係者400人が集い開村式が開催された。区民の“第二のふるさと”として設けられたこの施設は、単なる保養所ではなく、都市と村をつなぐ交流の拠点施設としての役割を担うものである。

5月12日には区内の小学5年生たちが2泊3日の移動教室の利用を開始した。

管理・運営には、同時期に設立した区と村の出資による「(株)世田谷川場ふるさと公社」があたることとなった。翌年にはシャトルバスが区から村への直行便として運行を始めた。



1987年(昭和62年)4月

### ■ 「世田谷和紙造形大学」開校

1987(昭和62)年4月に文化・創作活動のひとつとして世田谷和紙造形大学が開校し、体験・本科・専科の各教室が開かれた。この教室は日本の紙漉きの技法を応用して造形作品を制作するもので、特に本科コース参加者は、日常から離れた環境での作品づくりが魅力となって年8回の教室に足を運んだ。2008(平成20)年まで続いたこの教室からは約270名が卒業し、多くの卒業生による自主制作活動が現在でも続けられている。



1989年(平成元年)12月

### ■ 「川場スキー場オープン」

冬季の雇用と年間を通じて安定した観光客の確保を目指した川場スキー場がオープンした。冬のレジャーの目玉となるものが何もなかった川場村では、この事業にかける村民の期待が大きかった。

他のスキー場ではみることのない8階建ての立体駐車場(1~6階に1000台の駐車が可能)を完備し、7、8階がレストランとショッピングエリアと、若者の利用を見込んだづくり。リフトは日本屈指のフードつきクワッドリフト。高速運転で、スキーヤーの不満の原因となるリフトの待ち時間を解消した。雪質の良さもあり、人気のスキー場となった。



# 1991年(平成3年)～2000年(平成12年)

1991年(平成3年)11月

## ■ 縁組協定10周年記念事業

縁組協定から10年が経過し、様々な交流事業を行った成果を記念すると同時に、新しい事業の礎を築くために、10周年の記念事業を実施した。村の若者を中心に100人実行委員会を組織し、今まで培った交流の成果を最大限に発揮するとともに、企画から実施までを手づくりで行う「元気のでる村づくり」事業を3年にわたって展開した。「水と緑と土」と題したこの事業は、人と人とのつながりを強固にし、自分たちの住む村を改めて見つめ直すものであった。



1992年(平成4年)1月

## ■ 友好の森建設協定調印

縁組協定10周年を記念して、世田谷区と新しい事業展開を図るべく、相互に協力して「友好の森」建設事業を興した。“森を守り、育てる。森に学び、遊び、憩う”をコンセプトに、川場村中野地区に80haのエリアを定め、川場村の自然環境を協働して保全育成していくこととした。

村は、民有地の保存契約、林道・作業道の開設整備を行う。区は、森林ボランティアなどのソフト事業を推進することを主な分担とした。



1993年(平成5年)4月

## ■ 株式会社田園プラザ川場設立

川場村は21世紀を展望しながら、コミュニティ活動や世田谷区との交流活動の一層の活性化、農業を中心とした地場産業おこし、田園や自然環境を活かした村づくりの拠点施設を整備。この施設の運営・管理にあたる(株)田園プラザ川場が設立された。

1992(平成4)年より工事に着工し、1996(平成8)年に、農産物直売所など一部がオープン、1998(平成10)年にビール工房が完成し、グランドオープンとなった。また、同施設は1996(平成8)年4月に「道の駅」として登録された。



1995年(平成7年)6月

■「やま(森林)づくり塾スタート」

1992(平成4)年の「友好の森」協定調印を契機として、世田谷区と川場村は区民・村民の協働による林地保存と森づくり活動を開始した。1995(平成7)年4月に「きのこの森づくり」事業、同年6月には「第1回やま(森林)づくり塾」事業をスタート。家族での参加を想定した「体験教室」では森に親しみ楽しむ内容に、「養成教室」では、年間を通じて森林作業の基本や森づくりの意義を学ぶカリキュラムとした。



「やま(森林)づくり塾」はその後一層充実し、共有林を手入れする地区の共同作業に参加するなど、地域と連携した活動も展開している。また、養成教室の修了者からはより高度な技術講習への要望が出され、刃物の砥ぎ方、刈り払い機講習、チェーンソー講習などが内容の専科教室が実施された。

1995年(平成7年)7月

■「災害時における災害援助協定締結」

川場村と世田谷区は「災害時における相互援助協定」を締結した。これは、同年1月に発生した阪神淡路大震災を教訓として、災害時に互いにどのように支援しあうかを明文化したものだ。協定書には援助内容や応急物資の輸送などが盛り込まれ、年一回会議を開催し、連携を図っている。



1999年(平成11年)6月

■「森のむら・森の学校オープン」

6月5日、森のむらを舞台に、森のむら・森の学校のオープニング式典が開催され、林野庁をはじめ群馬県、友好の森地権者など約100名が出席した。「やまづくりくらぶ」代表者が「友好の森」を育てる誓いの言葉を読み上げ、クラブのメンバーによる手づくりの竹のゲートを使った入山式などの趣向が好評を得た。



# 2001年(平成13年)～2010年(平成22年)

2001年(平成13年)11月

## ■ 縁組協定20周年記念式典

縁組協定から20周年を記念し式典が行われた。これに先立ち6月には友好の森内に、そしてこの式典の際には、建立した記念碑の周りにコブニレの樹とともに、あわせて2001本のブルーベリーの苗を植樹した。これは7月に開催された「ブルーベリー産地シンポジウム」を契機に、全国一のブルーベリー産地への新たな決意の表れであった。

また、8月にはふじやまビレジ、なかのビレジの利用者が施設開設から15年で100万人に達し、両施設で達成記念式典も行われた。



2002年(平成14年)10月

## ■ 「森林フェスティバル川場・世田谷」

世田谷区と川場村は、友好の森協定締結10周年を記念し、村のランドマークである後山と田園プラザ川場を会場に、10周年記念事業「森林フェスティバル川場・世田谷」を開催した。森林の保全・育成を村民と区民が力を合わせて取り組むことを目指した友好の森事業は、多くの区民が森に入ってやま(森林)づくり塾(後の里山塾)を中心に活動しており、フェスティバルではこの様子を紹介し、一層広めようといわれたものである。



2005年(平成17年)7月

## ■ 川場・世田谷における共同宣言

世田谷区と川場村の交流についての新たな5つの事業に関する共同宣言が2005(平成17)年7月24日に行われた。

宣言は「区民健康村相互協力に関する協定」から四半世紀が経過し、区民と村民との間で続けられている交流がさらに深く、いつまでも続くよう、相互に協力して新たな5つの交流事業を推進する趣旨となっている。宣言の内容は次の5つである。

1. 文化交流事業の推進
2. 後山の整備(里山づくり)
3. 川場農産物のブランド化の推進
4. 農業塾の開設
5. 茅葺塾の開設



2006年(平成18年)7月

### 健康村里山自然学校開校

川場村の自然を協働で守り、育て、学ぶことを目的とした友好の森事業「やま(森林)づくり塾」と、新たに開始される「農業塾」、「茅葺塾」による包括的な里山保全活動を展開する「健康村里山自然学校」が2006(平成18)年7月に開校した。森林のみならず、荒廃の危機にある農地、茅場の消失等により姿を消しつつある伝統的民家など、後世に伝えるべき「川場村の原風景」を区民と村民が協働で守り、自然環境や景観を維持する活動を行う。これにより従前の「やま(森林)づくり塾」に加え、翌3月から「茅葺塾」が、4月からは「農業塾」が開塾し、それぞれ活動を開始した。



2006年(平成18年)10月

### 「鑑賞教室を世田谷美術館で実施」

世田谷区と川場村は文化交流事業の一環として、2006(平成18)年10月に小学生向け美術鑑賞教室を世田谷美術館で開催した。参加対象は川場小学校の4年生。子どもたちは川場村で美術館の学芸員やボランティアの区民による事前授業を受け、世田谷美術館を訪れて鑑賞を行った。過去には森の美術展・書展をはじめ芸術に接する機会として様々な取組みが行われてきたが、学芸員等による本格的な説明を加えた取組みはこれが初めてである。



# 2011年(平成23年)～2017年(平成29年)

2011年(平成23年)6月／10月

## ■ 縁組協定30周年記念事業「田んぼアート」開催

縁組協定30周年をひかえ、2010(平成22)年秋から開始された記念事業の企画と実行にあたって村内の農業後継者などを中心に集まった村内有志のグループ「縁人(エンジン)」が活動を開始した。これまでの周年事業に倣い、「縁人」による自発的な活動により様々な企画案が検討され、最終的に区民と村民による田んぼアートを実施することとなった。



田植えは村の中心部にあるつり橋「ふれあい橋」から見下ろす田んぼで行われ、当日は区民と村民約70名での田植えとなった。描かれたのは「世田谷・川場30th」。シンプルなものにも区と村の相互交流の思いが込められたものとなっている。

2011年(平成23年)10月

## ■ 縁組協定30周年記念式典 挙行

2011(平成23)年10月16日、川場村文化会館において、縁組協定30周年記念式典を開催した。式典において、両首長は縁組協定再確認書に署名し、同年3月11日に発生した東日本大震災の経験を教訓に自治体間の相互協力体制をより一層強化することなどを含め、これからも交流を深めていくことを再確認した。式典終了後には、文化会館の中庭にモミジの木を記念植樹した。



2012年(平成24年)2月

## ■ 川場村・東京農業大学・清水建設による「元気なふるさとづくり協定」締結

川場村-東京農業大学-清水建設は川場村の森林などの地域資源や再生可能エネルギーを活用した“元気なふるさと”づくりに取り組むため、2012(平成24)年2月に「元気なふるさとづくり協定(グリーンバリュープログラム)」を3者で締結した。

その後、3年間の調査・検討作業を経て、2015(平成27)年10月に生品小鳥沢地区において木材コンビナート製材施設の整備が始まり、翌年4月から木材コンビナート事業が稼働した。



2012(平成24年)10月

### ■ 川場村スポーツ広場リニューアル記念イベント開催

川場村スポーツ広場リニューアル記念イベントとして、日本女子サッカーリーグ第2部「スフィーダ世田谷対ベガルタ仙台」の公式戦が開催された。選手入場には、川場FCジュニアの子ども達が両選手をエスコートし、両チームの熱戦が繰り広げられた。



2014年(平成26年)9月

### ■ 川場村ライスセンター完成

国の補助事業を活用し、生品宮山地区に川場村のブランド米である雪ほたかの高品質を保つ一助とするためライスセンターを建設した。(株)雪ほたかが指定管理者となり、平成26年産米の受け入れから本格稼働した。最新の乾燥・籾摺り・精米機械を備え、村内米生産者の委託に応じる一方、高齢化などの理由で経営を維持できない農家から田植え・稲刈りなどの農作業を受託している。



2015年(平成27年)1月

### ■ 道の駅川場田園プラザが全国モデル「道の駅」に選定される

道の駅川場田園プラザが、全国に1040箇所ある道の駅(当時)のうち、地元の名物や観光資源を生かして多くの人々を迎え、地域の雇用創出や経済の活性化、住民サービスの向上にも貢献している特に優れた「道の駅」の全国モデル6駅の一つに選定された。



2016年(平成28年)11月

### ■ 自治体間連携フォーラムを川場村で開催

世田谷区総合戦略の策定にあたって前年度に開催した首長会談に引き続き、今後の自治体間連携・交流のあり方や広域での課題解決について話し合う場として、また、川場村との縁組協定35周年を記念して、第2回自治体間連携フォーラムを川場村との共催により実施した。



2017年(平成29年)5月

### ■ 川場村木質バイオマス発電施設完成

木質バイオマス発電施設「森林の発電所」が完成し、稼働が始まった。木材コンビナート事業の一環で、未利用間伐材を加工した木質チップ<sup>もり</sup>を熱して生成したガスを用いて発電を行っている(発電量45kwh)。

発電する際に発する廃熱は、同じく事業の一環で行っているイチゴビニールハウス栽培の暖房の熱源として活用している。



2017年(平成29年)7月

### ■ 区民健康村利用者200万人達成

区民健康村ふじやまビレッジとなかのビレッジは、2017(平成29)年7月に200万人の利用者を迎えた。2001(平成13)年8月に100万人達成以降、2011(平成23)年には、東日本大震災の影響で一時的に利用者数は減少したが、その後、施設利用者は着実に増加している。



## 東京オリンピック・パラリンピックを通じた交流

世田谷区は、大蔵総合運動場がアメリカ合衆国選手団のキャンプ地となったことをきっかけに、2016年6月にアメリカ合衆国のホストタウンに、2017年12月には共生社会ホストタウンにも登録されました。



また川場村も、世田谷区と連携してアメリカ選手団及び関係者等を受け入れるべく、2016年12月にアメリカ選手団のホストタウンに登録されました。

これらを契機にアメリカ合衆国との様々な交流事業が世田谷区で開催され、川場村の子どもたちも交流事業に参加して、世田谷の子どもたちと一緒に、貴重な経験と思い出づくりができました。

- 名称** アンソニー・アービン選手による水泳教室
- 開催日** 2019年8月19日
- 会場** 大蔵総合運動場温水プール
- 概要** 川場村から3名の子どもたちが参加。金メダリストから指導を受け、迫力ある泳ぎを体感した。



- 名称** ボッチャ世田谷カップ
- 開催日** 2019年8月24日
- 会場** 大蔵総合運動場体育館
- 概要** 川場村スポーツクラブ(6名)が参加した。予選リーグを全勝で突破し、決勝トーナメントに進出。



- 名称** 大蔵総合運動場陸上競技場オープニングイベント
- 開催日** 2019年11月23日
- 会場** 大蔵総合運動場陸上競技場
- 概要** 川場村長と川場村から8名の子どもたちが参加。イベント終了後に、新しい陸上競技場のトラックを子どもたち全員で一周した。



- 名称** アメリカ合衆国選手とのレター交流
- 実施日** 2019年～2021年
- 概要** 川場村の中学生(12名)がアメリカ合衆国選手と2往復の手紙のやりとりを行う。

**Letter Exchange with Team USA** アメリカ合衆国選手とのレター交流

世田谷区は、オリンピック選手団のキャンプ地として栄え、スポーツマンとして活躍する子どもたちが、世界中の選手と交流する機会があります。今年度は、アメリカ合衆国の選手と手紙のやり取りを通じて、お互いの文化や生活習慣を学び合います。

**レター交換の流れ**

①申し込み ②手紙のやり取り ③返事の手紙が届く

**スケジュール (予定)**

申し込み期間: 2019年10月1日～10月31日  
 手紙のやり取り期間: 2019年11月1日～2020年2月28日

**応募にあたって**

世田谷区在住の中学生(12名)が参加します。応募は、世田谷区立川場中学校で行われます。応募は、世田谷区立川場中学校のホームページで行います。

**応募方法・資料請求**

世田谷区立川場中学校のホームページから、申し込み用紙をダウンロードしてください。申し込み用紙は、世田谷区立川場中学校のホームページからダウンロードできます。

**お問い合わせ**

世田谷区立川場中学校 国際交流課  
 〒154-8504 東京都世田谷区川場1-1-1  
 TEL: 03-6466-2740 FAX: 03-6462-0030

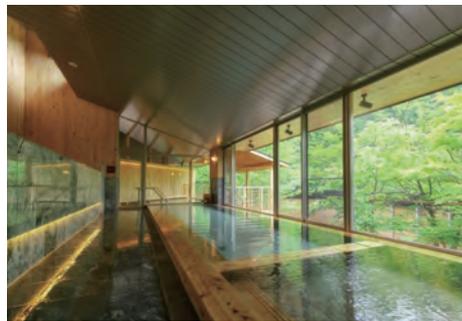
# 2018年(平成30年)～2022年(令和4年)

2018年(平成30年)8月

## ■ 区民健康村ふじやまビレジ「せせらぎの湯」供用開始

ふじやまビレジに、源泉かけ流し風呂、露天風呂を備えた新しい温浴施設「せせらぎの湯」がオープンした。

緑に囲まれせせらぎの音を感じることができ、自然に溶け込んだ趣があるだけでなく、内装材には至る所に川場村産の木材を使用しており、世田谷区と川場村の交流を象徴するつくりとなっている。



2019年(令和元年)8月

## ■ 区民健康村ふじやまビレジ「食事処さくら川」オープン

「食事処ほたか」を改装し、本格的な会席料理を提供できる空間としてリニューアルした。カウンター席から見える厨房には大きな薪窯グリルを設置し、落ち着きある和の空間を演出。薪窯グリルならではの生火が奏でるパチパチとした音色、生火ならではの温もりを五感で感じながら、至高の逸品を味わうことができる。



2019年(令和元年)11月

## ■ 「ディスカバー農山漁村の宝」に富士山集落活性化協議会が表彰

第6回選定「ディスカバー農産漁村(むら)の宝」のコミュニティ部門の一つに富士山集落活性化協議会が選定された。協議会の活動成果である「冬×ふじやまプロジェクト」や棚田オーナー制度、農業体験などを通じ集落内で実習や研究を実施する教育機関が増え、交流が深まった学生達と一緒にワークショップを開催するなど、新たな交流が生まれた事などが評価された。選定授与式と交流会は、総理大臣官邸で開催され、安倍総理大臣(当時)から選定証を授与された。



2020年(令和2年)4月・5月

■ 川場村から「飲むヨーグルト」と「レンジアップごはん」を寄贈

新型コロナウイルス感染症の影響により、外出自粛や臨時休校等により、家庭の食費の負担が大きくなる中で、4月に児童養護施設等に「飲むヨーグルト」1,200本が、5月には母子生活支援施設等に「雪ほたかレンジアップごはん」1,000個が川場村から寄贈された。



2020年(令和2年)8月

■ 区民健康村ふじやまビレジで木質バイオマスボイラー稼働開始

(株)世田谷川場ふるさと公社では、林野庁の林業成長産業化地域創出モデル事業の補助交付金を活用して、ふじやまビレジに木質バイオマスボイラー設備を1基設置し、自然(熱)エネルギーによる施設内への熱供給を開始した。

伐採木等を粉砕した木材チップを燃料としており、新たな木材需要を創出することで、村が進める林業振興や環境保全の推進へも貢献している。



2022年(令和4年)3月

■ 羽根木プレーパークリーダーハウスに川場産木材を活用

縁組協定40周年記念事業として、区立羽根木公園内のプレーパーク(冒険遊び場)にあるシンボリックな建物である「リーダーハウス」を、川場村の木材を使用して区の公共施設として整備した。

整備にあたっては、子どもたちのワークショップの意見を集約するとともに、ふるさと納税による寄附も活用した。



## 縁人と田んぼアート

縁組協定を締結して30周年を迎えるにあたり、村の若手を中心に縁組協定30周年記念事業実行委員会(縁人-enjin-(縁のある人が動力(エンジン)となり活動するというコンセプト))を組織しました。縁人は、縁組協定30周年記念事業として、田んぼに複数色の稲を植えて図柄を描く「田んぼアート」を行うことに決定し、図柄はコシヒカリ(緑)と黒米(黒)を用いて「世田谷川場30th」と描くこととしました。

田植えが行われた場所は、ふれあい橋の南に位置し、橋から田んぼを見下ろせる約1.5反の水田で、区広報紙などで区民の募集を募り、平成23年6月に田植え、10月に稲刈りが開催され、それぞれ約30人の区民が参加しました。また、この時に収穫されたコシヒカリ360<sup>キ</sup>は、同年度に世田谷区で開催された川場村物産展で無償配布を行い、一部を区内の児童福祉施設に寄付しました。

田んぼアートの絵柄は縁人のメンバーが考案し、24年度には村のモチーフであるSLを描き、27年度には、県マスコットキャラクター「ぐんまちゃん」と村のイメージキャラクター「かわたん」を描くなどバラエティに富んだ作品を手掛けてきました。

田んぼアートを通じた区民との交流事業は令和元年度まで毎年続きましたが、令和2年度は新型コロナウイルスの影響により中止となりました(縁人メンバーのみで田んぼアートを実施)。

縁人の30周年記念事業実行委員会としての活動は、次世代の実行委員会に交流事業の役割を託すため、令和3年3月末をもって一区切りとし、同年4月新たに川場村田んぼアート保存会-縁人-として改組を行い、令和4年度現在も田んぼアート活動を継続しています。

